

一側性難聴者の中学校在籍時に抱える困難に関する研究 —軽・中等度難聴者との比較を通して—

森谷 美雪

I 問題

1 軽・中等度難聴者の日常生活における困難

軽・中等度難聴者は、学校生活において授業での音声の聞き取りの困難や友人とのコミュニケーションの難しさなどの問題があるとされている（長谷川・菊池・竹中・斉藤・佐々木, 2001）。また、日本学校保健会（2004）の調査によると、休み時間に友達の声が聞き取れずに会話が成り立たない、休み時間や放課後に校内放送や大切な指示が聞こえないといった聴覚障害者もいると報告している。

2 一側性難聴者の日常生活における困難

一側性難聴者は片耳が聞こえるため、日常生活等に問題はないと言われてきたが、三浦（2005）は患耳側聴取、騒音下聴取、音源定位などに困難さがあるとしている。一側性難聴者は自己開示傾向が低く、健聴者とほとんど外見に相違がないことから周囲からの理解が得にくい（岡野・廣田, 2014）。岩崎（2013）は、聞こえの問題から人間関係のトラブルにつながる危険性もあるとしている。また、聞きづらさによって目の前の課題に集中できないことが教育現場でも生じており（神田・小淵・原島, 2012）、聞き取りに努力を要するため、周囲よりも疲れが生じやすい（大沼・マトキン, 1998）。

3 聴覚障害者の中学生の時期に抱える困難

青年期にあたる中学生の時期は、アイデンティティを形成しようとする時期であり、子どもから大人へ心身ともに大きく成長する時期である。

白井（1996）は葛藤を経験する聴覚障害者は小学校高学年から中学校の思春期に障害を意識し始め、学校生活で障害による問題を感じると述べている。また、岡野・廣田（2014）によると、一側性難聴者は、小学校中学年から中学校の時期は、

「人と違うことが恥ずかしい、ダメなこと」と一側性難聴の特性を隠す傾向があるとしている。また、思春期の多感な時期に難聴について思い悩み、周囲の理解不足に懐疑感を抱くことがあるとも述べている。

4 問題の所在

軽・中等度難聴者及び一側性難聴者は、通常学校に多く在籍しており、日常生活だけでなく学校生活の様々な場面で困難さを抱えている現状にある。軽・中等度難聴者と一側性難聴者の抱える問題は、補聴器装用の有無や聞こえの違いなどの違いから必ずしも同じとは限らない。これまで、聴覚障害者を対象とした日常生活や学校生活の困難さを明らかにした研究は多くなされているものの、一側性難聴者を対象とした学校生活に関する研究は散見される程度である。また、一側性難聴者の思春期である中学生の時期に焦点を当てた研究は少ない。

以上のことから、周囲への障害の開示など一側性難聴者の特有の困難さを明らかにする必要があると考えられる。また、一側性難聴を有する成人を対象として中学生の時期の困難さに焦点を当てた研究は意義があるものであると考える。

II 目的

本研究では、中学校在籍時における一側性難聴者の特有の困難さについて、小学校在籍時と高等学校在籍時の困難さと比較し、その時期に特有の問題があるか明らかにする。さらに、受けてきた支援の状況について一側性難聴者と軽・中等度難聴者の比較し、どのような支援や援助が必要かに関する情報を得ることを目的とする。

III 方法

1 調査対象

中学校に在籍していた一側性難聴を有する成

人（以下、一側性難聴者）4 名及び両側性軽・中等度難聴者（以下、軽・中等度難聴者）14 名を対象とした（表 1）。

2 調査方法

郵送もしくはメールによる質問紙調査を実施した。

3 調査期間

平成 29 年 8 月中旬～10 月下旬

4 調査項目

調査項目は、岡野・廣田（2014）を参考に作成した。以下の通りである。

1) プロフィール

2) 小学校・中学校・高等学校在籍時における教員、友人に対する聴覚障害の開示

3) 教員からの支援の有無及び支援内容

4) 学校生活における困難さ

5) 友人関係の困難さ、聴覚障害に対する捉え方と周囲とのかかわりにおける悩み及び悩みに対する対応策

5 分析方法

1) 聴覚障害における学校生活や友人関係の困難さ、周囲からの支援、聴覚障害の開示について、それぞれ小学校、中学校、高等学校段階で単純集計を行った。

2) 小学校、中学校、高等学校在籍時における聴覚障害による悩みに関する自由記述をカテゴリーに分け、分析を行った。

IV 結果と考察

1 教員・友人への障害開示

一側性難聴者は教員へ聴覚障害について伝えない人もいたが、軽・中等度難聴者は全員が伝えていた。教員へ聴覚障害について誰が伝えたかについて、軽・中等度難聴者は学年が上がるとともに自分自身で伝える者は増加する傾向が見られたが、一側性難聴者に関しては明らかな傾向は見られなかった。友人への障害開示については、軽・中等度難聴者、一側性難聴者ともに伝えた人と伝えない人がほぼ同数であり、明らかな傾向はみられなかった。

表 1 対象者のプロフィール（単位：人）

		一側性難聴者 (n=4)	軽・中等度 難聴者(n=14)
	性別		
	男性	2	6
	女性	2	8
年代 (歳)	20~29	4	12
	30~39	0	2
補聴器 装用状況	両耳	—	11
	片耳	—	3
平均聴力 レベル (dB)	~24	2	0
	25~39	0	0
	40~69	0	6
	70~80	0	8
	不明	2	0

2 周囲からの支援

教員から受けた支援として、「授業中の教員の話し方」、「板書の工夫」、「座席の配慮」、「補助教材の準備」、「難聴理解への促進」の 5 項目について 4 件法で回答を得た。その結果、軽・中等度難聴者、一側性難聴者ともに「座席の配慮」が最も多い支援内容となった。しかし、それ以外の支援については一側性難聴者、軽・中等度難聴者ともにほとんど受けられていない状況であった。このことは「座席の配慮」は教員にとって最も実践しやすい支援方法であるためと考えられた。

また、担任以外から支援を受けた経験のある一側性難聴者は 4 名中 2 名だった。担任以外からの支援に関しては、友人による支援が挙げられ、友人は身近な存在であり、中学生や高校生の時期には障害理解ができる年齢になることが関連していると考えられた。

3 学校生活場面における困難さ

「授業中の教員の話」、「大人数の場での教員の話」、「話し合い活動」、「体育館や校庭での指示や話」、「校内放送」の 5 つの場面での困難さについて 4 件法によって回答を得た。その結果、「授業中の教員の話」、「校内放送の内容」について「思う」、「やや思う」と回答した一側性難聴者は皆無だったが、「大人数の場での教員の話」、「話し合い

活動」については半数以上の一側性難聴者が「思う」、「やや思う」と回答した。一方で軽・中等度難聴者は、全ての項目で「思う」、「やや思う」と回答した。このことから、一側性難聴者は軽・中等度難聴者と比べ、学校生活場面で困難さを感じることは少ないと思われるが、大人数の場や話し合い活動の場面で困難さを感じていることが推察された。一側性難聴者は難聴耳側からの聴取と理解の困難さが指摘されており、話し合い活動は話し手が流動的に変化するため、難聴耳側から話しかけられた場合、全体の内容がつかみにくいことが背景にあると考えられた。

4 友人関係における困難さ

「1対1での会話が分からない」、「聞き返しによる友人の会話の諦め」、「伝えたいことが伝わらない」、「会話に入るタイミングが分からない」、「聞き間違いによるトラブル」、「数人での会話についていけない」、の6項目での困難さについて4件法で回答を得た。その結果、一側性難聴者は「1対1での会話が分からない」、「伝えたいことが伝わらない」ことに関して、「思う」、「やや思う」と回答した人は皆無だった。また、「聞き返しによる友人の会話の諦め」、「数人での会話についていけない」ことに関して「思う」、「やや思う」と回答した一側性難聴者は、軽・中等度難聴者と同様に半数以上を占めた。この背景として、数人での会話の場面で患耳側から話しかけられた場合、得られる情報が制限されたり一部の情報が得られにくいいため、話全体が分からなくなるといった状況が考えられた。また一側性難聴者は、音声で伝えることに関しては問題がないと考えられ、自分の言葉を相手に伝えることに困難を感じにくいと思われた。

5 一側性難聴者の悩み

自由記述によって聴覚障害による悩みに関する回答を分類した結果、5つのカテゴリーに分けられた(表2)。「聞き取りにくさ」に関する回答数は中学生の時期に増加し、「自分自身の障害認識」、「教室環境」に関しては、中学生の時期に減

表2 得られたカテゴリーと回答数(単位:人)

カテゴリー	ラベル	小	中	高
聞き取りにくさ	授業	0	2	0
	普段の会話	0	1	1
自分自身の障害認識	—	2	1	1
他者の障害理解	—	0	0	0
教室環境	—	1	0	1
その他	—	1	1	1

少した。

〈聞き取りにくさ〉のカテゴリーの普段の会話に関することについては、「となりの難聴側の席の子から小さな声で話されると聞こえなかったため、何度も指摘された。(原文通り)」といった患耳側聴取の困難さが挙げられ、先行研究と同様の結果になった。また、〈自分自身の障害認識〉については、「みんなが片耳しか聞こえないものだと思って生活をしていたので学校では始めてイレギュラーだと気づき、不安になった。(原文通り)」、「聴力検査を皆と一緒にするのが嫌だった。カチャと押すのが分かるから。きこえないことを自覚させられてしまう。(原文通り)」などの回答が得られ、軽・中等度難聴者よりも一側性難聴者から悩みが多く挙げられた。一側性難聴者の障害への気づきは小学校の時期が多く、中学生の時期には聴力検査で周囲に障害を知られることを避ける様子がうかがわれた。

V 総合考察

1 一側性難聴者の学校生活における困難

一側性難聴者の学校生活における困難について、授業場面での困難さは少ないと思われたが、大人数の場や話し合い活動などの患耳側聴取や音源定位が困難になる場面では困難さを感じやすいことが示唆された。また、友人との会話では、患児側からの話しかけや数人数での会話に困難さを感じやすい傾向があった。さらに、教員へ障害を開示したにも関わらず、支援が受けられないなど軽・中等度難聴者よりも支援が受けられにくい状況がみられた。これらのことから、周囲の支

援や配慮として座席の配置などの授業中の配慮や健聴耳側からの話しかけ等の話し手側の配慮が必要であると思われた。

2 中学生の時期の困難

中学生の時期の困難について、一側性難聴者から聴力検査などで周囲に障害を知られることを嫌がる様子が見られ、軽・中等度難聴者と同様に周囲との違いや他者に知られたくないといった悩みを抱えていることが示唆された。また、軽・中等度難聴者から、英語や部活動に関する悩みや担任以外からの理解が難しいといった悩みが挙げられ、小学生とは異なる新たな悩みを抱きやすいと思われた。本研究では、一側性難聴者が中学生の時期に抱く悩みについて明確な傾向が得られなかったが、軽・中等度難聴者と同様の悩みを少なからず抱えていると考えられた。これらのことから、教科担任制になる中学生の時期には学校全体の共通理解と情報共有の必要性や一側性難聴者の障害に対する慎重な対応が示唆された。

3 今後の課題

本研究において、中学校在籍時に抱える一側性難聴者の特有の困難さや支援・援助の基礎となる資料を得ることができた。しかし、軽・中等度難聴者及び一側性難聴者に対して、共通の調査用紙によって回答を得たため、一側性難聴者からの回答を深めることはできなかった。また、本研究では支援が受けられていない状況について、本人が支援を必要としているかどうかまでは明確にできなかった。

障害を開示しない理由や支援を必要としているかどうか、どのような支援を希望するかなど、詳細に聞き取りを行い、深める必要があると考えられる。また、本研究では、対象者が少なかつたため、結果として得られたことに関して、すべての一側性難聴者が同様の傾向があるとは限らない。そのため、対象者を増やしても同様の傾向が得られるかを検討する必要があると考える。

文献

長谷川洋・菊池真理・竹中佐和・斉藤康幸・佐々木寿子(2001) 聴覚障害児教育における分離教育と統合教育：教育を受けた立場から 筑波技術短期大学テクノレポート, 8(2), 57-63.

岩崎聡(2013) 聴覚に関わる社会医学的諸問題「一側性難聴の臨床的諸問題」. *Audiology Japan*, 56 (4) , 261-268.

神田知佳・小渕千絵・原島恒夫(2012) 片側擬似難聴における騒音下の単音節聴取能と注意喚起の効果について. 聴覚言語障害, 40 (2) , 53-59.

三浦哲(2005) 一側性難聴による学業成績等への影響に関する文献考察. 北海道教育大学紀要(教育科学編) , 56, 205-211.

美濃孝枝・鳥越隆士(2007) インテグレーションをしている聴覚障害児童生徒に対するあり方に関する調査ー本人の語りからの分析ー. ろう教育科学, 49 (2) , 47-66.

日本学校保健会(2004) 「難聴児童生徒へのきこえの支援 - 補聴器・人工内耳を使っている児童生徒のために -」. 2004年12月, 〈<http://www.gakkohoken.jp/uploads/books/photos/a00035a4d8026657a6b6.pdf>〉(2018年1月7日) .

岡野由実・廣田栄子(2014) 一側性難聴児の学校生活における実態と課題に関する検討. *Audiology Japan*, 57 (2) , 156-166.

大沼直紀・ノエル・マトキン(1998) 聴覚障害が子供に及ぼす影響. 筑波技術短期大学テクノレポート, 5, 171-174.

白井一夫(1996) インテグレートした聴覚障害者の思春期における葛藤に関する研究ー仲間集団との対人関係を中心にー. 上越教育大学大学院修士論文.